

## 論文

## 「ウリサラム」(私たちの人々) と呼び合う共同性

— 京都マエブケの朝鮮人住民にとっての場所をめぐる —

呉 仲元<sup>†</sup>

**要約**：本稿で対象とするのは、1940年代から60年代に京都市西京区下津林前泓（マエブケ）町で生活を営んでいた朝鮮人住民である。戦前、ここは軍需工場の建設するため多くの朝鮮人を集めた飯場の跡地であった。戦後、工場閉鎖にともない、行く場を失った朝鮮人はマエブケに居残るようになり、さらに他の地方からも朝鮮人が多く集まるようになった。マエブケは国有地であったため、行政サービスを受けることができず、インフラ整備も住民たちの手によって行わざるを得なかった。しかし、マエブケの人々はありとあらゆる手段を講じて生き抜いていく。その中で飯場の改築や養豚業のノウハウ等、村で生じる様々な問題を住民どうしで共同して解決していく。本稿ではマエブケの住民間の助け合いを軸に、かれらの交流の場である広場や民族組織の事務所に焦点を当て、「ウリサラム」（私たち人々）と呼び合う共同性の構築過程を描き出す。

**キーワード**：在日朝鮮人、共同性、場所

## 目次

1. はじめに
2. マエブケに集まった人々
3. 住民の共有の場
  - 3-1. 助け合い、励まし合い
  - 3-2. オルシン（大人）たちの憩いの場
  - 3-3. 子どもの遊び場
4. 民族団体と共同性
  - 4-1. 拠点としての「サムソ」（朝鮮総連事務所）
  - 4-2. 桂の民族学校
  - 4-3. ウリサラムという共同性
5. おわりに

## 1. はじめに

京都市西京区下津林<sup>しもつばやし</sup>、陸上自衛隊桂駐屯地のすぐ北側に前泓町<sup>まえぶけ</sup>という集落がある。こ

<sup>†</sup>同志社大学大学院社会学研究科社会学専攻博士後期課程

\*2022年7月5日受付、2022年7月8日掲載決定

の地域は戦前、海軍の要請を受けて三菱重工が軍需工場を建設するため多くの朝鮮人を集めた飯場の跡地であった。戦後、工場閉鎖にともない、行く場を失った朝鮮人は、この国有地を生き抜くための拠所として徐々に作りかえた。その後、他地からの移住者を加えて、ここはいわゆる「朝鮮部落」となった。この地は、近隣住民からは集落全体が「飯場」と蔑んだ調子で呼ばれ、京都の他地に住む朝鮮人からは大括りで「下津林」、あるいは意地悪く「桂のアパッチ部落」と呼ばれてきた歴史がある。本稿では、地域住民がこの地域を「前泓(マエブケ)」と自称してきたことを尊重し、その発音をとって「マエブケ」と呼ぶ。マエブケに注目したのは、数ある京都の在日朝鮮人集住地区の中でも、朝鮮人の人口の密集度が高く、その人口も多かったからである。戦後のマエブケには朝鮮人約50世帯、百数十人が居残った<sup>(1)</sup>。その後、1960年代後半までに、人口は3倍に人口が膨れ上がっていくのである。マエブケに朝鮮人が集住したのは、「外国人お断り」の賃貸住宅が当たり前のようにまかり通っていた時代に朝鮮人に居住の場を提供していたからでもある。そこに同郷人の地縁、血縁、知人をたどって、新規移住者がやってきた。こうした場所だっただけに、当時活発に民族運動を展開していた朝鮮総聯がマエブケに事務所を置くとともに、そこがイルクン(朝鮮総連職員)の居住先ともなっていた。

本稿の目的は、マエブケに集まって来た朝鮮人たちが国有地を生活の拠所としていく際に行われる住民どうしの助け合いに焦点をあて、その中で生じる共同性の構築過程を描き出すことにある。特に本稿では、戦後から1960年代後半にかけてマエブケ住民が集った場所に注目して、住民の日常を考察する。その際、在日朝鮮人の生活に関する文献を検討に加え、さらにマエブケ住民とのインタビュー調査、それに関連する新聞記事を組み合わせて論述する。

在日朝鮮人社会の形成やその生活実態については、これまで多くの歴史学者や社会学者によって明らかにされてきた。古くは朴在一(1957)、比較的近年では歴史学者の外村大(2004)が新聞記事や行政資料を参考に朝鮮人社会を描いた。その後も金菱清(2008)や島村恭則(2010a)によって、いわゆる「不法占拠地区」の在日朝鮮人の生活についても描かれるようになった。かれらは数年間にわたり福岡や大阪の朝鮮人部落に入り込んで参与観察を行い、不法占拠地区で生活する在日朝鮮人の実態を明らかにすると同時に、その移転問題に関しても研究を深めた。しかし、これらの研究は不法占拠地区の朝鮮人の実態を幅広く明らかにした点においては本論文の直接の先行研究となる。ただ、日本社会から排除され、さらに在日同胞からも時にさげすまれるなかでも、その集落のなかでは独特の共同性が見られることはしばしば指摘されてきたが<sup>(2)</sup>、その点における学術的な解明は十分ではない。

他の「不法占拠地区」と同様に、マエブケに流入してきた人々は実に多様な経歴を有

していた。決して同質ではない朝鮮人たちが、なぜ、どのようにして共同性を築きえたのか。本稿では、かれらが集まった場所と、そこでの助け合いのあり方に注目して、その共同性について論じる。

共同性と一言で言っても、その中身は多様なものである。本稿で参照したいのはノックスら(2013)のマイノリティ集住論である。ノックスらによれば、少数派集団の集住には防衛、支援、維持、攻勢の4つの基本的機能がある。「防衛」は、カナダのチャイナタウンでリンチや暴行が横行した時期に住民たちが一カ所に集まって生活したことに表れているように、集住によって住民たちを守る機能のことである。「支援」に関しては、例えば英国のイスラム教モスクが文化的宗教的な中心であると同時に、地域福祉システムを中心として機能し、飲食、娯楽、教育の拠り所を提供していたことに表れているように、住民たちの相互支援の機能のことである。また、集住することで、ホスト社会に完全に同化するよりも、固有の文化的アイデンティティを保持し、同じ民族間で婚姻しやすくなるなど、伝統文化の継承にもつながった(「維持」の機能)。そして、ときに集住はホスト社会と戦う際の「基地」を提供する抵抗の空間となり、たとえば選挙のときには投票力となって表れて公式の代表を選出させることができる(「攻勢」の機能)。これらは欧米の都市を事例とした集住の機能であるが、ではマエブケの場合はどうだったのか。これが本稿の視点となる。

以下本稿では、日本各地で生活していた朝鮮人たちがどのような経緯を経てマエブケに集住するようになったのかを、インフォーマントの証言と歴史資料を参考に述べる(2)。続く3・4では、こうして各地から集まった多様な人々が共同性を構築していく過程に注目する。まず、マエブケのオルシン(大人)と子どもたちが集う場所(広場)に着目し、そこで交わされる日常の会話から当時の住民が何を話題にし、何を求めていたのかを探る(3)。そのうえで、京都における民族団体(主に朝鮮総聯)の設立とその活動について述べた上で、マエブケ住民が民族団体の事務所(サムソ)をどのように活用し、自分たちの文化や財産を守ろうとしてきたかについてインフォーマントの証言を基に述べる(4)。以上の記述をもとに、マエブケの共同性が果たした役割と機能について考察する(5)。なお、インタビュー調査におけるインフォーマントの属性については表1で示している。

表1 インフォーマントの基本属性

名前	年齢	性別	国籍	出生時地域	現住所	世代	職業
B	78歳	女	朝鮮	岡山県岡山市	前泓町	在日2世	主婦
C	73歳	男	朝鮮→韓国	前泓町	前泓町	在日2世	会社員
H	69歳	女	朝鮮→韓国	前泓町	京都市北区	在日2世	主婦
J	73歳	男	朝鮮→韓国	京都市北区西陣	前泓町	在日2世	飲食店経営
K	83歳	男	韓国	京都市右京区上桂	前泓町	在日2世	無職
R	60歳	男	朝鮮→韓国	前泓町	前泓町	在日2世	会社員
S	62歳	女	朝鮮→韓国	大阪府大阪市塚本	滋賀県	在日2.5世	主婦
T	82歳	女	朝鮮	朝鮮	前泓町	在日1世	主婦

## 2. マエブケに集まった人々

戦前、マエブケに朝鮮人が住み始めたのは、1932年に京都市土地区画整備事業計画が決定され西院、西京極、梅津、西七条を含む地域が都心に近く工場適地であり開発が急がれるなか、その労働力として朝鮮人が雇われていった頃のことであった。京都市の統計によると、当時、川岡学区（マエブケを含む地区）には朝鮮人142人がこの地区に住んでいた（表2を参照）。その後、1940年からは軍需工場の建設に朝鮮人が動員され、その数は7,000人に膨れ上がっていた。

Cさんの父親CFさんは、戦前からマエブケで働いていた。その軌跡を追うと、まずCFさんは、舞鶴軍港の拡張事業や丹波地区の鉱山事業の土木現場で働いた。その後、1941年に京都の精華町川西村の弾薬庫（大阪陸軍兵器補給廠祝園支廠）で土木作業員

表2 川岡小学校と周辺の諸学区比較

(単位：人)

年	1935年				1970年			
	学区名	朝鮮人人口 (A)	総人口 (B)	朝鮮人人口率 (A) / (B)	学区名	朝鮮人・中国人人口 (A)	総人口 (B)	朝鮮人・中国人人口率 (A) / (B)
右京区内各学区	川岡	142	3711	3.83%	川岡	757	20391	3.71%
	桂	206	4356	4.73%	桂	358	22901	1.56%
	松尾	126	3412	3.69%	松尾	234	18884	1.24%
	西京極	449	5304	8.45%	西京極	1008	20278	4.97%
	西院	1247	16714	7.46%	西院	596	10401	6%

出典：京都市社会課『市内在住朝鮮出身者に関する調査』1937年、人口調査時は1935年  
 総理府統計局『昭和45年国勢調査報告 第3巻 その26 京都府』、『同 第4巻 国勢統計区編』  
 注：1) 1970年の「朝鮮人・中国人人口」31731人内、朝鮮人が30826人、中国人が905人であった。

として働いた。その後、戦争が激化するなか桂の軍需工場で働くことになった。CFさんが桂で働くようになったのは、兵役を免れるためであった。精華町では1943年、寄留簿(現在の住民票に相当。図1を参照)と居住実態とを合わせるための一斉調査をおこなった。この頃、朝鮮人に対し1944年から兵役法を施行する準備作業として、「壮丁」を正確に把握するための寄留簿登録および戸籍の整備事業が展開されていた(樋口2001)。精華町史によれば「朝鮮への徴兵制実施を前に川西村在住朝鮮人男子の一斉調査を行う」とあり、そこには「寄留事務ニ在リテハ昭和十九年度ヨリ朝鮮ニ徴兵制度ヲ施行セラル」と記載されている。この兵役の地ならしとしての寄留簿の登録が、朝鮮人土工たちをして「軍需工場に逃げる」という行為へと向かわせたのだ。それは当時、朝鮮人の中で「軍需工場で働いていれば兵役を免除される」という噂が広がっていたからである。CFさんも、土工仲間の紹介で桂の軍需工場(マエブケ)で働きはじめた。また、弾薬庫で働いていた同僚たちも桂やウトロの軍需工場<sup>テグ</sup>で土工として働くようになったという。このようにCFさんのように、徴兵を免れるために桂の軍需工場に向かった朝鮮人は数多く、かれらがマエブケの飯場に住むようになった。

もちろん、桂の軍需工場<sup>ウイソン</sup>で働いていたのは、そのような経緯でやってきた朝鮮人だけではない。その他にも、戦時動員によってここで働くことになった朝鮮人も含まれていた。Hさんの父親(HFさん)は慶尚北道の大邱近郊の田舎町(義城郡)の出身で、徴用で九州の炭鉱で働いた後、桂の軍需工場<sup>テグ</sup>で土工として働いていたという(Hさんの証言から)。HFさんは当時のことについて「私が日本に来たのは昭和十五年〔1940年〕ごろ。大林組とその下請けの山岡組が人夫を集めていて、私は徴用され、ここへ働きに

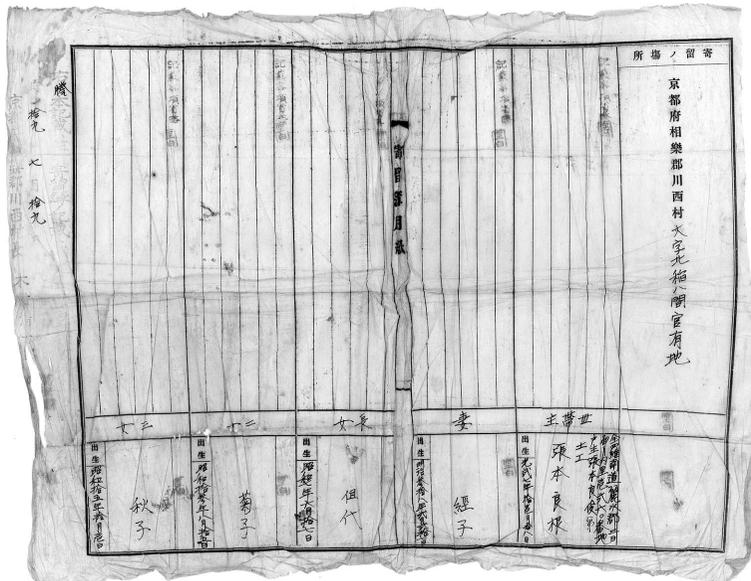


図1 Cさんの父親の寄留簿

来た」と語っていた(京都新聞 1991: 2)。

太平洋戦争前後に多くの朝鮮人たちが動員され日本の炭鉱や軍需工場などで働かされた。HFさんは故郷に妻や子を残したまま九州の炭鉱で働いていた。桂の軍需工場で働きはじめてから、1943年に故郷から妻を呼び寄せたという。その後、HFさんは九州の炭鉱で働く妹の家族も桂に呼び寄せた。当時、HFさんの妹は夫と共に九州の炭鉱で生活していて、桂に来るときに炭鉱で働いていた80人の人夫も一緒に連れてきた。HFさんの夫は軍需工場の工場の造成や瓦拭きといった重労働に従事し、HFさんの妹は朝早くから夜遅くまで軍需工場で働く人夫のための食事を作っていた。その他、桂の軍需工場には日本各地から男女問わず多くの朝鮮人が労働力として集められた。全さんは、大阪の軍需工場で機械を疎開させる仕事のために桂にやって来た。大阪で空襲がひどくなると危険を感じ、家族を桂に呼び寄せた。また、李さん(女性)は中学生だった14歳のときに、学校からの徴用により桂工場に来て、7千人の人夫のために食事を作った(京都新聞 1991: 2)。このように戦前、桂の軍需工場には、戦時動員による者、空襲や兵役から逃れるためにやって来た者など、さまざまな経緯で多様な朝鮮人たちが集まってきた。

戦後マエブケの住民は、このとき以来この地域に定住した者もいる。しかし、それが多数者ではない。敗戦により朝鮮人の徴用は解除されたが、三菱の工場は操業を停止し、住民たちは仕事を失った。朝鮮半島に帰る者も数多かった。しかし、帰る当てのない者、朝鮮半島に統一国家ができて政情が安定するまで待つ者、財産の持ち帰り制限にためらった者など、さまざまな理由でマエブケの飯場跡に残る人々もいた。かれら(「残留組」と呼ばれる)は飯場跡を利用して、「村」をつくっていった<sup>(3)</sup>。戦後のマエブケには朝鮮人約50世帯、百数十人が居残った(『朝日新聞』1999. 7. 14夕刊)。その後、1960年代後半までに、人口は4倍に人口が膨れ上がっていく。各地から、住む場所、働く場所を求めて、さまざまな経緯でマエブケへと朝鮮人たちが集まってきた。たとえば京都府北部の軍港や鉱山が閉鎖されると、そこで土工として働いていた朝鮮人単身者(一部所帯持ち)が借宿として一時的にマエブケに住んだ。そうした人々のなかには、仕事の都合がつくとマエブケから去って行く者も少なくなく、戦後初期のマエブケの人口的な流動性は高かった。朝鮮人の出入りが繰り返されながらも、1950年後半にはその人口も倍に増加していった。

マエブケの人口に次の大きな変化をもたらしたのは、1959年にはじまった帰国事業である。最終的に約10万もの共和国への集団移住をもたらした帰国事業は、マエブケにも大きな影響を及ぼした。マエブケを後にする人たちが残した家をアパートに改築するなどして、地域の住民の入れ替わりもあった<sup>(4)</sup>。

この時期の帰国運動の高まりとともに、1955年に民族団体の路線転換によって発足

していた在日本朝鮮人総聯合会(以下、朝鮮総連)の活動も活発になった。当時、朝鮮総連を支持する在日朝鮮人は80%を超えていたともいわれ、その活動を積極的に支持する人も少なくなかった。それとともに朝鮮総連の活動も最盛期を迎え、朝鮮学校建設や総連の文化活動も全国規模で展開されていった。朝鮮総連の末端組織である分会(朝鮮語で「プネ」と呼ばれる)の活動も活発に行われるなか、マエブケにも総連系の人々が多く住み始めた。当時の朝鮮総連上層部は、若い活動家(「イルクン」と呼ばれる)の生活を安定させるため、比較的家賃が安く活動拡張にもつながる朝鮮部落にかれらを住ませた<sup>(5)</sup>。BさんとTさん、Sさんもこの時期にマエブケに移住してきた朝鮮総連系の人たちである。京都市内で「チョッパンサリ」(借間)をしながら生活していたBさんは、朝鮮総連京都府本部の委員長であったペ・ウンス委員長の紹介で総連系住民<sup>(6)</sup>所有の飯場長屋に居を構えた。六畳二間の小さなキッチンが付いたバラック長屋の一軒家で、Bさんは3年間生活した。その後、68年に桂分会(以降「カツラプネ」)が売りに出されたのを機にそれを買って現在の住まいにしている。家を借りることになった頃のことをBさんは次のように語る。

わたしは60年代初旬にここにきました。やっとの一軒家〔借家〕あったやけどな。来てみたらね、後ろは豚小屋、窓開けたら豚小屋。雨降ったら、もうほれ、下水がないからね、縁の下からみな、ひどい豚のふんの匂いするやろ、もうたまらんかったわ。しょうなしに、そこで何年間も耐えました。〔中略〕耐えられたんもトンネ〔近所〕の人、みんなチョソンサラン〔朝鮮人<sup>(7)</sup>〕でいろいろ助けてもらいましたからね。

やっとの思いで移住してきたのであるが、そこは生活するには少々不便があったようだ。しかし、朝鮮人が多く、助けあいもあったので安心してくらせる安堵したという。

Sさんの場合、小学校のころ大阪から父親の転勤(総連関係)でマエブケに来た。最初来たころは、家ではなく大きな倉庫に住んでいたという。そこは床しかない大きなバラックのようなところで冬は寒さで十分寝ることもできず逆に夏は暑さを耐え凌がなければならなかった。それを祖父や兄弟の助けで少しずつ改装して住める状態になったのはマエブケに来て10年後、Sさんが総連系の朝鮮銀行で働き始めたころであったという。Sさんは、マエブケでは貧乏し苦勞することもあったが、大阪に居住していたときよりもマエブケでの生活の方が幸せであったという。

ここはな、チョソンサランばかりやから楽しい、遠慮いらんやろ、大阪は近所みんなイルボンサラン〔日本人〕あったからしんどかった。ウリハッキョ〔朝鮮学校〕も遠かったしなあ。〔中略〕ここは、すぐトンム〔友だち〕と一緒に勉強したり遊んだりでたし、幸せやったわ。アボジ〔父さん〕にありがとうやわなあ、ここに引っ越して来てくれて。

このように総連系の住人は、主に京都の朝鮮総連の幹部の紹介でマエブケに住むようになったものが多かった。引用のように、朝鮮人が多くて周りに気兼ねすることもなく住める場所で子育てすることに移住者も満足していたようだ。

マエブケの朝鮮人人口は、1950年までは出入りが激しかったが、1960年代になると、朝鮮総連系の人々が家族で移住したことなどにより、定着が進んだ。戦後マエブケに集まってきた人々は、さまざまなバックグラウンドを背負ってやってきた人々であった。それは、住宅や職業などにおいて「朝鮮人お断り」が当たり前のようにまかり通っていた日本社会の構造的差別の産物でもあった。他地から人々がやってきたのは、まずマエブケが安価に部屋を借りられるという好条件があったからであることは言うまでもない。それだけではなく、マエブケにある独特の「チョソンサラン」(朝鮮人) どうしのつながりと住民の懐の広さがあった。Bさんは、「チョソンサランって同じようなハン〔恨〕やチョン〔情〕があるから、すぐに分かちあえる」と語っていた。周囲の日本人たちの目にはそう映らなかったかもしれないが、マエブケはチョソンサランであれば、どのような背景をもつ人であろうが受け入れる朝鮮人に優しい地域性があった。以下、この点に地域の共同性について考察していこう。

### 3. 住民の共有の場

前章で述べたような経緯を経て、マエブケはほぼ朝鮮人だけが住むことになった。マエブケにはバラックが建ち並び、畑を耕し、豚を飼い、朝鮮語が飛び交う、一種独特の地域性をもった集落となっていた。それは、周りの日本人にとっては、近寄りたがたい印象を与えてもいたであろう。周りの日本社会からも一定程度隔絶されることによって、結果的には集落の防衛機能を果たしていたとも考えられる。しかし、住む場を求めて各地から朝鮮人が引き寄せられ、そこに定住していったことから分かるように、住民にとってマエブケは捨てがたい魅力をもった場所であった。その内実に分け入るために、本章では、「ウリサラム」(私たちの人々) と朝鮮語で呼び合う空間がどのようにつくりあげられていくのかを、彼らが集う共有の場を通して明らかにしていく。以下、まず戦後直後にまで遡りながら、マエブケ形成初期から見られた助け合いと励まし合いについて確認したうえで、大人と子どもの共有の場について論じる。

#### 3-1. 助け合い、励まし合い

1945年8月10日に桂の軍需工場は操業がストップした。13日には「敗戦らしい」という噂が流れた。そして8月15日、日本は敗戦を迎えた。工場は完全に閉鎖され、飯場の電気が止められた。それだけではない。それまで飯場の給水は、工場の方で地下水

を組み上げ、パイプで引いて共同台所に送られていた。この給水も止められたのである。マエブケに住む住民の金炳学さんは当時を振り返って次のように語る(京都新聞 1991: 3)。

土木作業を担当していた大林組の詰め所に行って、「使う時は馬のように使い、用がなくなったら水、電気を切るとは何事だ」と抗議した。そうすると、「トランスと電柱一本を上げる」といわれた。そして家に小さい電灯をつけた。〔中略〕やがて、三千円で手押し車を買って、グループで水を運んだ。それから数軒ごとに共同で畑などに井戸を掘り、手押しポンプを付けて水を確保した。

この共同で井戸を掘った場所が現在の池のそばであり、この手押しポンプも長い間、その近くに放置されていたようだ。戦後、軍需工場の飯場に取り残された住民は自力でインフラを整備していった。数件毎に作られた井戸は5軒から8軒の家庭で共同利用され、すこし離れたところに、その単位でトイレが設置されていた。そこでは生活上の相談や帰国のことについて話あっていたようだ(Cさん、Hさん、Sさんの証言から)。このようにマエブケでは、最初から助け合いの共同性があったというよりも、ともに対処しなければ生きていくこともできない状況のなかで共同性が生まれ、そこに親密な対話の場も形成されていったのである。

住環境に関していえば、まずマエブケで始められたのは飯場長屋を住める状態に改装することであった。改装といっても、飯場に風が入らぬように板やブリキで防ぐ程度のことであり、ほとんどの飯場は夜に星が見えるほどに隙間だらけであったという。その飯場長屋は戦前、一棟の長屋に8世帯が押し込められるほどの小さい部屋であった。戦後に引っ越してきた李さんは、父の祖母、父母、兄、妹3人と本人合わせて8人が粗いゴザを敷いた八畳二間で寝起きしていたという(京都新聞 1991: 3)。

Cさんも戦後はこのような家に住んでいたのだが、隣の部屋が空くとその持ち主と交渉した上で部屋を拡張していった。その改装に近隣のオルシンたちが手を貸してくれたという。

柱や屋根はもとの「飯場」のものを利用したが、壁や縁の下を作るための材料に困った。チョンソンスランのためにね、近所の人が桂駅周辺に出た廃材を拾ってきたり、または日雇の仕事現場でいらなくなったブリキやトタンを現場から持ち帰ってね、それを壁に貼ったりしたんところがいますか、近所のオルシンが協力して手伝っていたと聞いてます、チョンソンスランってチョン〔情〕があるんですよ、チョンが。

戦後、配給は滞るなか、マエブケ住民は食べ物も分かち合った。マエブケ住民は自分たちの畑、すなわち空地进行を自ら開墾してつくった畑で採れた野菜や果物をおすそ分けし

たり、その代わりに他の野菜やキムチをもらってくるといった具合に、助け合って生活していた。

うっとこオモニ〔母親〕なんか、コム〔父側の叔母〕の家に野菜やキムチ持っていったり、トンネ〔村=マエブケ〕の知り合いの人にもキムチ分けてましたよ。もちろんトンネの人が「ナムルつくった」言うて持ってきたり、「鶏炊いた」言うて、持ってきたりしてました。助け合いみたいもんがあったんと違えますか、私の小さいときにね。野菜はみんな家でつくってましたよ、それぞれの家でね。野菜だけちごて、くだもんや、野菜類みんな、そやし食べもんに不自由したことないんです、小さいときは。なんせ、うっとこあんなに土地いっぱいあったし、野菜もいっぱいつくってましたからね。わたしが知っているときは牛も馬もいましたよ、家に。牛に引かせて、畑耕してましたよ。アボジ〔父親〕は米もつくってはりました。

と当時、Hさんはトンネ(マエブケ)の人々が自給自足していたことや住民どうしの助け合いが日常茶飯事であったと語る。

1963年に電話加入数が500万台を超えるなか、マエブケに固定電話がある家庭は2,3軒しかなく、1軒の電話を数十の家庭で共同で使用していた。Hさんは、電話共有について不満があったらしく、当時を振り返って次のように語る。

うちの家が電話一番についたんですよ。そんでしょっちゅう呼び出ししてあげてたんです。Zさんの家の娘に用事があったら、うっとこの電話にかかってくるんですよ。そしたら向こうの家まで私が呼びに行くんです。「電話やで」言うてね、それもしょっちゅうありましたよ。私は邪魔くさかったけど、オモニは「近所の娘さんやし、かまへんやん」っていつも言われてました。

HさんのオモニはHさんに「同じチョソンサランやしなあ、助けあわんとあかんのや」と口癖のように言っていたという。当時のマエブケの空間は、チョソンサランどうしが助け合うことは当然であり、子どもたちも助け合う大切さを親から教わっていくのである。

マエブケ住民の助け合いは資金調達にも及んでいた。結婚費用や子どもの進学、開業資金など、何かの元手が必要になった場合、住民らは知り合いどうしで頼母子講を開いた(ここの在日一世は「タヌムシ」と発音するが、ここでは「タノモシ」と表記しておく)。タノモシとは10名前後の住民で毎月金を拠出し、月ごとに順番で住民一人がお金を引き落とすシステムになっている経済的な互助組織である。Hさんは、タノモシが開かれていたことについて次のように語る。

コム〔父親側の叔母〕の家でタノモシしてはったん覚えてます。近所の人が、なんか結婚

式とか家の増築なんかにお金必要あったんちゃいますか？そんなときお金いるでしょう？そしたら、おばさんたちが集まってタノムシしますねん。オモニもコムとこに行行ってやってはったわ。タノムシ終わったらコムの家でご飯食べて帰ってきはるんです。

戦後から 1960 年代後半まで、朝鮮人が十分な経済的信用や担保を持ってない時代に盛んにおこなわれていたタノムシは、朝鮮人が日本社会に進出するきっかけを与え、朝鮮人の経済活動を支えた。マエブケ住民が 1960 年代を機に居酒屋、焼肉店、スナックといったサービス産業に多く参入できたのもタノムシがあったからであり、アパート経営やほかし工場の経営資金もタノムシで集めたものであった。1990 年代にマエブケ住民の中で経済力を持つ者が増えると、タノムシの回数も徐々に減り、現在では主に親睦のためにタノムシを開くケースが増えている。このようなタノムシは朝鮮人どうしのネットワーク強化につながった。ときに、マエブケ以外の朝鮮部落との交流も盛んにさせ、仕事探しや嫁探しまで、マエブケ住民の行動範囲を広げるきっかけともなった。

これ以外にも、朝鮮総連の桂分会（カツラプネ）のネットワークも住民の行動範囲を広げるための役割を果たした（4-1 で詳述する）。カツラプネは、南は南区の久世分会や吉祥院分会<sup>(8)</sup>、北は西京区の鈴川分会や松尾分会、右京区梅津分会などのプネと総連ネットワークを通して連携を強めた。その活動は嵐山やユフェ（野遊会）や様々な総連のイベントにマエブケ住民を参加させ彼らのネットワークを広げる手助けをした。このようなプネのネットワークは、日雇いやバタヤといった仕事の新情報を得る機会も与えてくれた。

うちのアボジやらが桂駅の近くの月見ヶ丘を開拓しに山口組に雇われて、行ったんですわ。行ったら、竹藪やから。〔中略〕竹って根っこがすごいじゃないですか、それを全部除去するんですよ。そのときに、20 代の朝鮮人の大学生のバイトもいるんですけどね、その時バイトしてた兄さんが僕にね、チャンドム〔C さん〕のアボジ〔父親〕は面白い人でしたよ。昼ご飯の時にね、「昔なあ、ごっついパンゲジェンイ〔屁こき野郎〕がおってな、ソウルでパンゲ〔おなら〕したらピョンヤンまで聞こえたやつがおったんや」とかね、そういう冗談する人あったんですよってね、うちのアボジ（父親）のこと言うんですよ。そういうこと言えるユーモアがある人あったって言ってました。なんか仕事先で知り合ったとか言ってました。

この日雇いのバイトは、もともと松尾の朝鮮人青年に依頼されたものであったが、人手が足りないので、総連ネットワークを通してマエブケの朝鮮人に仕事が回ってきたのである。このような総連ネットワークは、マエブケの住民の生活を改善させる機会を与えるものであった。また C さんも総連ネットワークを利用して工場の開業資金を調達していた。

私は、姉の旦那がしているプラスチック成形の会社で修行して、24 歳のときにマエブケにね、今の会社を建てたんです。その前にね、いろいろ日本の銀行まわったんですが、ちっともお金貸してくれませんねん。私、プネにしよっちゅう出てましたから、朝銀に顔見知りが出て、二つ返事でお金貸してくれました。ほんま同胞ってありがたいですわね。

このように、その資金調達もネットワークがあればこそ可能であったと語る。さらに C さんはマエブケ同胞の助け合いについても次のように語る。

〔きょうだい〕わたしと女ばっかりあったけど、5 番目に私ができてね、アボジ 49 歳、オモニが 42 歳の時のことでした。私が生まれたときはトンネがひっくり返ったんやて。〔中略〕みんなが「男ができてよかった、よかった」ゆうてね、そんでトルチャンチ〔満一歳の祝い〕のとき、私の誕生日のときに近所の顔ききのオルシンがおんにゃけど、その人が言うには、「お前のトルチャンチの時な、みんな一軒ずつカンパしてもらうために、わしが一軒ずつ回ってな、10 円、20 円集めたんや、トルチャンチ祝うためにな」って言ってました。

当時、収入の少ない朝鮮人たちは子どものためのトルチャンチも開くこともできなかった。それを知った近所の住民が C さんの誕生日を祝うためにお金を集めてくれたのである。当時のマエブケ住民にとって〈他人事は自分事〉であったのである。

戦後、手押し車を購入しグループで協力して各家庭に水を運ぶことからはじめたマエブケ住民の助け合いはインフラ整備にはじまり、食べ物の分け合いや開業資金の調達、また 1 台の固定電話を数十の家庭で共有するなどの日常生活のあらゆる事柄に及んだ。このような助け合いがあったからこそ、「ウリサラム」と住民たちが呼び合う村が作りあげられたのである。

以下では、集いの場である大人たちの憩いの場と子どもたちの遊び場に注目し、マエブケ住民の共同性の構築過程を明らかにしていく。

### 3-2. オルシン（大人）たちの憩いの場

広場はマエブケに 2 カ所あった。一つは池（共同ポンプのあるところ）がある辺りで、主にオルシン（大人）が集まり談義を重ねるところであり、もう一つは子どもたちの遊び場である。オルシンたちは、広場で夏は暑さを凌ぐために、また冬になると拾って来た布や枯枝を大きなドラム缶に入れ、焚火の回りに集まって寒さを凌ぎながら雑談をした。焚火の回りに集まるときの掛け声は「ドンドン行こか」であった。

ここでは祖国の話題やマエブケ内の出来事、そして主に仕事（日雇いなど）の情報を交換した。1950 年代、日本社会は高度経済成長だったが、朝鮮人は構造的差別のなかで仕事を得ることもできず、その生活は最低の水準に達していた。当時のマエブケの収入源は養豚、バタヤ（リサイクル業）、そして日雇い労働であった。そのような環境の

なかでオルシンたちの情報交換は頼みの綱であった。広場は、マエブケに関連する出来事についての情報交換の場であり、同時に遊び場でもあった。春、夏にはみんなで焼肉を楽しんだり、テーブルや椅子を置いて朝鮮将棋をするオルシンたちもいたという（Cさん）。

Cさんの自宅は池（広場）の目と鼻の先にあった。当時のオルシンたちについてCさんは次のように語る。

土方の仕事しかないから雨降ったら、オルシンがうっとこ家に来て、仕事ないから昼間からタツベギ〔濁酒〕飲んで、炊いたスジ〔スジ肉〕食べて、ハット〔花札〕して、そんなん覚えてますわ。わたしとこの前にポンプ〔池のそばのもの〕があつてね、みんなのたまり場あつたんですわ。ハットしてて、勝ち負けでね。〔中略〕「お前とこの先祖は根性悪あつた」まで言うてね、ま、しつこくやりました。あのころ亀岡で牛一頭買ってきて、トンネ〔マエブケ〕の人が金出し合つて、ごちそうあつたんと違いますか、うちの家の前が。昔ね、水道つてないから井戸のガチャポン〔ポンプ〕であつて、そのそばでみんなで焼肉してね、おいそうに食べてました。

あと、チャンチ〔結婚などの宴〕ね、昔みんな家でしましたんや。そんなときはね、うちの前で豚殺すねんね。最高の馳走じゃなかつたんですかね、そんで近所のオルシンたちが料理するのに、みんな手伝いにくるし、その近所のアジュモニ（おばさん）やらも手伝いにきて。ほとんどみんな、手づくりですんね。結婚式でお客さんがいっぱい来たら、一軒だけでは足らへんもんね。近所の家の部屋貸しだして、またその家でどんちゃん騒ぎですんね。朝まで宴会してました。

このように、生活に追われながらも、楽しむことを忘れない朝鮮人の気質についてCさんは語る。1960年代に小学生だったSさんも当時のマエブケで開かれた結婚式について、次のように語る。

昔はな、チャンチ〔結婚式〕ゆうたら、その家にうっとこオモニが近所のオモニと一緒に、ご飯炊き行かはんねん。朝から晩までやで。〔中略〕自分の家のことはそっちのけで、そんな日は、うちらはみんなその家まで行って、で、ご飯食べんねん。チャンチはほんま朝鮮風あつたよ。綺麗なチョゴリ着て、朝鮮の食べ物いっぱい置いてな、「わーすごいなー」っていつも思ってたわ。

このように池の側の広場はオルシンたちの憩いの場であり、生活苦のなかで唯一楽しさを味わえる場所であった。そして、そのそばには、オルシンたちが酒を交わすO商店があった。図2は、O商店が経営するノルンバン（遊び部屋）である。

O商店はオルシンたちが集う万屋兼酒場であった。O商店を経営していたのはJさんの母親（JMさん）である。Jさん（O商店の長男）の家族がマエブケにきたのは戦後であるが、Jさんの父親は戦前、マエブケにあった軍需工場で屋根ふきの仕事をして



図2 ノルンバン (遊び部屋)

いたから、マエブケのことをよく知っていた。1927年、京都の西陣に生まれたJMさんは、16歳で結婚し、夫の仕事(日雇い)の関係で、日本全国の飯場を回り、最後にマエブケに居を構えた。1989年に桂駅近くの焼肉屋ができるまで、JMさんは1953年からマエブケで営業を続けた。Jさんはオモニについて次のように話す。

オモニは日本の小学校を卒業して読み書きもきっちりできる頭のいい人で、西陣からこっちに来て、すぐ商売はじめたんですよ。本当に働きものでしてね、朝3時ころ起きて、仕入れに市場〔京都卸売市場〕まで自転車でいくんですよ。そこでトンネの人が必要なもんを何から何まで、みんな仕入れてくるんですよ。マッコリ〔濁酒〕は知り合いの朝鮮の人に作ってもらって、お店で売ってました。

JMさんが経営するノルンバンは、オルシンたちの交友の場であった。そこで一日の疲れを癒し、「ドブ」(密造酒)を交わしながら親交を深めた。そこは唯一祖国のことを思うノスタルジアに浸れる場所でもあった。そこはことあるごとにオルシンたちが集まり、故郷の話や仕事の話、また朝鮮の情勢を語り合う場であった。またそこは、花札や朝鮮将棋で賭け事をする場でもあった。お金を賭けて花札をするので「勝ったり負けたりのケンカが絶えなかったようである。当時のノルンバンの様子をBさんは次のように語る。

○ 商店で、博打する部屋でお酒のんで毎日のようにケンカしてましたわ。その商店でドブ作って売ったりしてたんやわね。何回か警察がきてね。マッコリで、○商店のとこ何回か来たことありますよ。壺みんな割られてはったわ。警察入ってきて、しかし、それでも懲りずにやってはったもん。ずーとやってはったわ。

いくら警察の圧力が加えられても営業を続けられたのは、Jさんの母親が気丈で賢明な人物であり、当時のノルバンがオルシンたちにとってなくてはならない場所であったからだ。オルシンたちは、警察の圧力に屈するどころか、毎日のようにO商店を訪れ、酒を飲み交わしていたという。

O商店は、オルシンたちの憩いの場であったと同時に、住民が日ごろ利用するスーパーでもあった。Hさんは次のように語る。

私ら、小さい時からO商店あったんでね。毎日のように行ってましたよ。お菓子や飲みもん買いに行ったりね。オモニとかは、チュエサ〔朝鮮の法事〕に足りないもんとか買いに行ったりしてたよ。あとマッコリとかも売ってたしね。ほんま便利なスーパーあったよ。

このように、池（共同ポンプのあるところ）の側の広場はオルシンが集まり談義を重ねる場所であり、情報交換の場でもあった。また、O商店はオルシンにとって唯一故郷について語り合える場であり、郷愁に浸れる場でもあった。オルシンのこのような日常生活における交流は住民たちのつながりを強化させ結束を高める効果もあった。共同ポンプの近くでは祝い事がある度に豚を捌いてみなで分け合って食べ、そこで朝鮮の歌や踊りを踊ったりするなかで互いの信頼関係を構築し、それがコミュニティ形成へとつながっていったのである。

### 3-3. 子どもの遊び場

子どもたちの遊び場（広場）は、戦前からある空地で、ゴミ捨て場があったところである。ただの空地ではなく、そこをオルシンたちが子どもたちのために整備し広場にしたのである。子どもたちは手づくりの滑り台（図3を参照）で遊んだり、野球をしたりしながら放課後をそこで過ごした。

この広場では、上下関係がはっきりと示され、先輩は後輩を家族のように大切にしていたようである。Cさんは、小学校の頃に中学の先輩についての印象を次のように語る。

広場でね、上の人〔先輩〕は自分が食べるでも、ぼくらに饅頭やいろいろなもんくれました。〔中略〕またね、小さいもんから〔滑



図3 広場に集まる子どもたち（1957年頃）

り台を] 先滑らして、あとで上がすべるんですわ。上下関係がちゃんとできててね、学校行ってもぼくらは上から守られてたから、いじめられなかった。

1950年代当時、マエブケのほとんどの家庭で養豚業や養鶏業をしていたため、親が小さい子どもの面倒を見ることができなかった。そのため子どもたちは、広場で過ごす時間が多く、その面倒をマエブケの先輩たちが見ていたのである。

次に広場は子どもどうしの情報交換の場でもあった。Cさんは小学校の4年生から中学校の3年間、新聞配達や牛乳配達をして家族を支えた。その情報を提供してくれたのが、広場で知り合った先輩たちであった。

私が小学校の頃はトンネの人、みんな貧乏あったから、自分が貧乏してるって一回も思わなかった。私らお金ないから、みんな小学校から新聞配達や牛乳配達みたいなバイトしてましたよ。バイトの情報はみんな上から教えてもらうんです。

小学校の頃から、マエブケの子どもたちは情報を交換し互いに助け合い協力し合っていた。子どもたちの助け合いは小学校でも見られる。例えば、当時、日本の学校に通う朝鮮人の子どもたちがいじめの対象になっていた。しかし、マエブケの子どもたちが通う川岡小学校では朝鮮人に対するいじめはほとんどなかった。Cさんは次のように語る。

[学校で] いじめられた女の子が僕らに言うてくるんですわ。「日本人にいじめられてる」って。[私らが]「そいつの名前ゆえ」言うて、そいつのどこ行って、ボコボコにするねん。[中略] [友達は] みんなマエブケの子どもばかりで、自分たちだけで団結してるっていうか、小さいときから一緒ですからね。みんな、一心同体みたもんですわ。

マエブケの子どもたちは、小さいときから一緒にあそび、一緒に育つ家族であった。当時、民族差別が激しいなかでも学校でマエブケの子どもたちがいじめにあうことは稀であった。それだけ、子どもたちも「差別されてたまるか」と、常に身構えていたのである。

差別の対象であったマエブケの子どもたちは、どんなに学校で差別されても、ものもしなかった。Hさんは次のように語る。

私ね、「チョーセン」って言われても何も思わなかったんです。だって物心ついた時から「朝鮮人」って知ってましたから。トンネの人も広場で遊ぶ子もみんな「朝鮮人」でしょ。朝鮮人を自然に受け入れてきました。

1950年代、日本人が朝鮮人に対して独特の抑揚をつけて「チョーセン」「チョーセン

ジン」と差別的に呼ぶ言い方があった。しかしそのように呼ばれたとしても、自らが「朝鮮人」「チョソンサラン」としてアイデンティティを持っていれば、何ということではなかった。このようにマエブケという空間で生きていたことが、彼女を差別の苦しみから救い、彼女のアイデンティティの形成に大きな影響を与えていた。

さらに H さんは公立小学校での運動会の思い出を次のように語る。

運動会のときね、マエブケの子どもたちを応援するブースだけが別個にありますねん。それだけうちらに力あったんとちゃいますか。アボジやらは「チョソンサラン」全面に出して、わたしら応援してくれてましたわ

当時のマエブケ住民のなかに、朝鮮人であることを恥じる人は少なかった。マエブケが朝鮮部落であろうが日本社会から孤立していようが、子どもたちから見たマエブケは親や先輩たちが自分たちを大切にしてくれ住民がいる村であり、学校での嫌がらせから守ってくれる住民が住む村であったのだ。上でも述べたが、聞き取り調査の中で、インフォーマントの多くから「チョソンサラン」ってということに対して一度も恥じたことはない、という声を何度も耳にした。

ここまで、大人たちの集う広場や子どもたちが遊ぶ広場で、マエブケの人がどのようにつながっていたのかについて見てきた。これらはいずれも飯場の跡地以外には何もないなかで、マエブケの住民たちが生き延び、人間らしく生きるために構築されてきた共同性であった。その意味ではそれぞれのつながりはその必要性に応じて形成されたものであるが、ただそれらが全て個別バラバラのものというわけではない。そこにあった民族団体の存在を外して、これらの共同性について十分に論ずることができない。次章では、朝鮮総連とマエブケ住民の関係に注目して考察していく。

#### 4. 民族団体と共同性

1950年代、在日朝鮮人の8割以上は朝鮮総連を支持していたと言われている。しかし、なぜかれらが朝鮮総連という団体に入り、それを必要としたのかについては十分に考察されてこなかった。その際に重要なのは「下」からの、つまり住民からの視点である。朝鮮総連はピラミッド型の組織構造を持っているが、全てのことが上意下達でできあがっているわけではない。マエブケの住民たちには、かれらなりの朝鮮総連をめぐる関係の構築があり、またそれに対する意味づけがある。本章では、そうした観点からマエブケ住民と朝鮮総連がどのようにつながっていくのかを明らかにするとともに、団体事務所(以下、「サムソ」)の役割や意味づけについてもあわせて述べていく。また、マエブケには在日本大韓民国居留民団(以下「民団」)系の住民もいたが、特に分け隔て

なく住んでいたことに注目しながら、「ウリサラム」と呼び合う関係について考察する。

#### 4-1. 拠点としての「サムソ」(朝鮮総連事務所)

日本の敗戦直後、8月19日と20日に、京都市右京区では朝鮮人たちが西院小学校に集まって集会を開き日本の敗戦を確認し合い、自衛と生活権確保、帰国のために団結を訴えた。1945年9月24日には在日本朝鮮人聯盟(以下「朝連」)京都府本部が結成され、烏丸五条の裴善康<sup>ベソンガン</sup>氏の個人宅に本部事務所が置かれた。当時、右京区には朝連の太秦支部があり(現在の京都市右京区西院三蔵町)、右京区内に支部傘下の数多くの分会ができた。

マエブケでは、かつて軍需工場があった作業所近くの飯場長屋の一室を改装し、朝連事務所ができた。住民たちはそこを朝鮮語で「サムソ」(事務所)と呼んでいた。そこを拠点に、帰国を急ぐ住民の帰国手続きや、生活上の課題についてのアドバイスが行われたという(朝鮮総連西南支部委員長の証言より)。その後、中央の団体は大きく変わった。朝連は占領下の1949年に強制的に解散させられ、朝鮮戦争期には民戦(在日朝鮮統一民主戦線)が結成された。そして1955年5月には路線転換し、朝鮮総連となった。しかしこうやって団体は変わっても、住民はその事務所を変わらず「サムソ」と親しみを込めて呼び、生活上の困難や子どもの教育についての相談などに利用していた<sup>9)</sup>。

その後、1961年に東京や大阪の朝鮮総連分会で総連模範創造運動が始まると朝鮮総連第6回大会が開かれ、朝鮮総連中央は全国に点在する分会に向けて「模範分会」活動が呼びかけた(呉圭祥 2006)。その運動の最中である1962年に、マエブケ区の住民は京都府朝鮮総連右京支部傘下の桂分会という位置づけとなった。朝鮮語で分会は「プネ」と言い、以下、この分会のことを住民の呼称にもとづいて「カツラプネ」と記す。マエブケのプネ活動が活発化し会員の数も増大するなかで、1968年には京都府朝鮮総連西南支部がマエブケのなかに設けられた。さらに1972年、マエブケのカツラプネは「桂第一分会」と改名されたが、住民たちは以前と同じく親しみを込めて「プネ」と呼びつづけた。その後、1977年にカツラプネは元の飯場跡から京都府朝鮮総連西南支部の事務所内に移転した。以下では住民たちがプネをどのように利用し、彼らが朝鮮総連に接近して行ったのかについて、事例をもとに詳しく述べていく。

##### (1) サムソの防衛機能

サムソは集住地区の防衛機能という点では重要な位置を占めていた。1950年頃に占領軍が土地の明け渡しを要求してきたが、住民たちは戦前に朝鮮からいやいや連れて来られ、軍需工場に入れられ、過酷な労働を強いられてきたと抗議し、その要求を断念させた。その後もマエブケの土地が国有地であるという理由で、しばしば周辺農民との小

競り合いが起きていた。度重なる農民の嫌がらせに対して、朝鮮人住民は一致団結して、戦後間もない頃に大林組が言い放った「勝手に土地を使いなさい」という言葉を根拠に反発し、農民に対して自分たちの正当性を主張した<sup>(10)</sup>。その後、このような小競り合いを嗅ぎつけたマスコミが記事に取り上げマエブケの土地問題が世間に広まると、住民はサムソに集まって協議を重ねるようになった。プネには当時の朝鮮総連の青年会の活動家も数人いた。青年会メンバーはこのような不当な問題に対し住民たちの先頭に立って農民との交渉にあたった。当時の出来事について C さんは次のように回想する。

土地のことで日本側が苦情を言って来たのは2回ありますねん。一度目は近所の百姓が朝鮮人が不法占拠しとるって言いがかりつけてきたんですわ。畑の野菜とってるゆうてね。そのとき、百姓と話し合いになったんですわ。たぶん昔の総連のプネでね。

二度目はね、1950年代の後半ごろちがいますかね。昔な、読売新聞の記者がスクープしよったんですわ。あそこマエブケは、でっかい土地があって、そこを不法占拠してる朝鮮人がいるってね。日本の国としてどうなっているのか、という記事やったと思いますよ。それをあとで聞きつけたオルシンやらがね、抗議して「それを書いた記者を呼んで来い」言うてね。

一度目も、二度目も交渉の拠点はプネであった。住民たちの多くは非識字者であったため、日本人側と交渉は青年活動家に頼った。彼らの中にはマエブケ出身の大学(京大や神大)卒の若者もいて、彼らが先頭に立って交渉を行った。その結果、農民との話し合いは無事に決着し、スクープされた記事については記者がもうこれ以上記事にしないという確約したうえで、オルシンたちの前で土下座し、問題は解決した(Cさんの証言から)。このような問題解決にプネが使われ、その活動家が大きな力を発揮した結果、朝鮮総連に対する住民たちの信頼度も増していったとCさんやHさんは述べている。その後も養豚場の悪臭問題や周辺住民からの嫌がらせがあるたびに、住民はプネに集まって対策を練り、諸々の問題を解決していった。

## (2) 学習の場、出会いの場

プネではオルシンたちの非識字問題を解決に取り組み、こどもたちの学習室や青年会の勉強会を行う場であった。1950年代からプネジャン(分会長)を務めた朴凡黙<sup>パクボンムク</sup>さんや上で紹介した全炳学さんたちオルシンも、ここで朝鮮の政治や歴史を学んでいたという<sup>(11)</sup>。

1960年代、一部の一世のなかは文字を読める人もいたが、女性のほとんどは非識字者であった。文字が読めない問題に悩んでいた女性たちはプネで開かれる「ハッスプフェ」(学習会)に積極的に参加して少しずつ文字(朝鮮語や日本語)を習い始めたという(図4参照)。Tさんは当時のハッスプフェについて、次のようにプネの活動を自慢する。



図4 2005年西南支部主催慰安旅行

(備考) 2005年の西南支部主催の慰安旅行の写真で、Tさんは最前列の右から5番目。

私の家の裏側にブネがあつてね、ここのブネは組織的にはチャルハゴイソツソヨ〔朝鮮総連の組織活動においては、よくやっていました〕。朝からハッスプ〔学習〕や字読めん人に字教えたりしてね、ハッスプフェが終わったら、みんなでご飯食べて安定所いったり内職しはじめたりしたんです。その熱心さが評価されてチョングツ〔全国で〕有名になってから、モボンブネサン〔模範分会賞〕をもらったんですよ

このような学習は当時、「模範運動」が全国に広がるなかで展開されたもので朝鮮人住民の非識字問題解決に貢献するものであった。

ブネは子どもたちにとっても自習室兼遊び場であった。Sさんは、1960年代に朝鮮学校に通っており、マエブケ内に5名いた同級生とよく遊びに行っていたという。彼女たちは、学校に登下校するときも同じで、学校から帰ってくるとすぐにブネに遊びに行っていた。当時を回想しながらSさんは次のように語る。

ブネなあ、学校帰って来たらしょっちゅうブネに遊びに行ってたわ。もちろん宿題とかもブネでしたよ。ときどきカヤグム〔伽耶琴〕も練習したり、ウリノレ〔朝鮮の歌〕歌ったりしたりもしてた。お菓子もあつたんで食べながら遊んだりもしてたわ。それだけ、わたしらには身近な存在あつたんや、ブネって。親は朝から晩まで家でほかしして働いてるし、じゃまなつたらあかんやん。だからブネで遊んでたんや。

Sさんは、学校で習った歌をブネでもみんなで歌ってたことを思い出して次のように語る。

私らがプネにいったら、チョニン〔専任〕のオンニ〔お姉さん〕がいてな、ピアノ弾いてくれんねん。それに合わせて、私ら、「ウリナラキッパル、アールンダーウンキッパル、チーブヌウエボルボル、ハールノッピボルボル」〔私たちの旗、きれいな旗、屋根の上でひらひら、空に向かってひらひら〕って歌うねん。ほんま楽しかったわ、あと「キミルソンチャンゲンネノレ」〔金日成将軍の歌〕とかも歌ってたよ。

このように1970年まで朝鮮学校の子どもたちがよく口ずさんでいた歌を歌ってくれた。最初の歌の題名は「コンファグクキッパル」(共和国の旗)で、朝鮮初級学校の3年で習っていたという。次の「金日成将軍の歌」は在日朝鮮人なら一度は聞いたことのある歌で、1950～60年代に朝鮮総連系の人の間では、ことあるごとに歌われた。

またプネでは定期的に勉強会が行われたり(後述)、青年たちが集い、飲み会や食事会等が開かれたりする場でもあった。そのなかで若者が知り合い、結婚するケースも多々あった。同胞との結婚を考え朝鮮総連の勉強会に息子や娘を参加させる一世の親たちも多くいた。Sさんは次のように語る。

ソンジョンデ〔宣伝隊；後述〕のオッパ〔お兄さん〕とプネに来てたマエブケのオンニ〔お姉さん〕が密かに付き合ったりしてたんやで。プネで知り合って結婚するケースって普通にあったやん。

このように、プネは同胞の若い男女知り合うことができる数少ない場所であった。プネジャン(分会長)が朝鮮総連のネットワークを活用して結婚相手を探してあげるケースもまれではなかった。実際、Sさんもプネジャンの紹介で相手を見つけ結婚している。このようにプネは在日朝鮮人の学びの場であると同時に出会いの場でもあった。

### (3) 祖国を想像する場

マエブケのプネでは、「チョチョン」(在日本朝鮮青年同盟の略称「朝青」の朝鮮語読み)所属の青年たちが週末毎に集まって、勉強会を開き共和国についての情報を得たり、そこで朝鮮歴史、文化について学んだりもした。その指導に当たっていたのは「8・15政治学院」で教育を受けた講師たちで、かれらは朝鮮総連に所属する活動家であった<sup>(12)</sup>。かれらは朝鮮の歴史や文化を青年たちに教える一方、社会主義祖国(北朝鮮)の優越性について熱く語った。1950年代後半のマエブケ住民には上で述べたように朝鮮総連支持者が多く、青年たちもチョチョン活動に参加することを当然であると考えていた。

Cさんの姉(長女)は、朝鮮総連が設立される以前から民族団体活動に積極的で、マエブケの朝青では中心的な存在であった。その影響もあり、帰国事業が始まった時も長女は両親に家族全員での共和国への帰国を進めていた。

姉がチョチョンに出ていてね、バリバリ〔熱心〕でしたよ。北朝鮮は税金もないし学費も無料やし、私を勉強させようと、親に「国に帰ろう」ゆうてきかんかったんですよ、それで、アボジも折れてね、家の家財道具みな一回売ったんですわ。それで荷物全部整理して、船まで決まっていたんですよ。「第10船で帰る」ってねえ。それから北の悪い噂<sup>(13)</sup>がバーと広がったんで、オモニが止めようゆうて帰らんかったんですよ。

Cさんは帰国を断念した経緯について語る。Cさんの姉が学費無償と言ったのは、金日成首相が1956年に朝鮮労働党第3次大会で「在日朝鮮学生たちが共和国北半部に来て勉強する事を望むなら、何時でも歓迎し、国家費用で〔中略〕衣食住と学費の一切を無償」と報告を受けたものであった(小此木2004: 125)。1960年、Cさんのマエブケの家はすでに知り合いの久世の朝鮮人に売却済みであったが、母親の説得で取り返すことができた。マエブケの朝鮮人の中では、それほど多くは帰国しなかったが、Cさんの家族のように、貧しさのあまり共和国の生活を夢みる人は多かったようだ。Cさんの姉たちはみなチョチョン活動に熱心で、姉4人全員が朝鮮総連の支持者または活動家と結婚した。Cさんも西宮の活動家に嫁いだ姉の紹介で朝鮮総連系の女性と結婚した。Cさんがチョチョンに加盟するきっかけも姉の影響も強かったようだ。チョチョンの活動についてCさんは次のように語る。

私は10代の時からチョチョンに出てました。そのときは、チョソンサランやしね、当然参加しんとあかん思ってたけど。私の姉〔長女〕が総連キチガイ<sup>(ママ)</sup><sup>(14)</sup>でしたんでね。そんな影響で、私も小さい頃からチョチョンに出んとあかんと思ってた。プネで朝鮮の本読んだり、朝鮮の文化みたいなもんも勉強してましたよ。プネにはチョチョンのメンバーが常に10人くらいいて、朝鮮半島の政治や文化の話してました。

1960年代、プネを拠点にした朝鮮総連の活動が盛んに行われていたが、その一つが「センジョンデ」(宣伝隊)である。これは、夏に朝鮮大学校(1956年創立)の学生が全国各地のプネに約1か月間滞在し、朝鮮の文化や歴史を地域の子どもたちに教えるという活動のことである(現在は、朝鮮大学校の学生も減少し、センジョンデの活動も縮小されているようである)。Sさんはセンジョンデの先輩たちの印象を次のように語る。

夏になったら、チョウデ〔朝鮮大学校〕からセンジョンデのオッパやオンニが来てて、近所のイルボンハッキョ〔日本の一般の学校〕に通ってる子を勧誘しに一緒について行ったりもしたよ。イルボンハッキョの子にウリマル〔朝鮮語〕やウリノレをオンニたちが教えてるのを手伝ったりもしたよ。夏が来るのんいつも楽しみにしてたわ。

Sさんはチョウデから夏に一度来るオンニたちから朝鮮の文化や歴史を学ぶなかで、将来、朝鮮学校の先生になることを夢に描いていたという。

1960年代は、北朝鮮では多くの映画が製作され、日本各地の朝鮮部落で映画鑑賞会が開かれていた。プネ主催の映画鑑賞会も年に幾度かあった。そのときの情景についてRさんは次のように語る。

夏の暑い日にね、広場〔子どもたちの遊び場〕で映画鑑賞会するんですよ。ま、うるさかったですよ、映画始まる前はね。子どもは泣くは、アジョシ〔おじさん〕は端っこで酒飲んでるわ、もう祭りですわ、祭り。私の同級生のアボジがムネドン〔在日朝鮮人文化同盟〕で働いていてね、その人がマエブケに住んでたんですよ。その関係で開催してたと思います。「チョンリマ」〔千里馬〕が出てきたり、朝鮮が発展する風景とか、戦争もんでアメリカ軍を命かけてやっつけたみたいな内容でしたわ。向こうの歌って迫力あるでしょう。もうみんな、感動してましたよ。ハラボジ〔おじいさん〕から小さい子どもまで。〔中略〕そのときはシーンとして見てましたわ。今あったら、嘘って言う人いるかもしれんけど、当時はリアルでしたよ。

当時（1960年代）、娯楽というものがなかったマエブケ住民にとって映画はリアルで迫力があるものであったようだ。まだホスト社会からの差別がひどい中で生活している住民にとって北の力強い映画は苦難を乗り越えるための強い力を住民に与えてくれた。

1950～60年代のプネは、マエブケのオルシンをはじめ小学生や青年までの各層が各々の目的に応じて利用できる場所であった。プネは外部の嫌がらせに対処するための戦略を練る場であり、青年たちが集い政治や文化を学ぶ場であり、ともに祖国を夢見る場でもあり、恋する場でもあった。そして、子どもたちにとっては遊び場であり学びの場であった。またプネはマエブケ以外の朝鮮人とのネットワークを強化すると同時に、朝鮮語学習や同胞どうしの結婚といった文化継承の役割も担っていた。プネはマエブケ住民が「ウリサラム」と呼び合う共同性を構築する上でなくてはならない文化の維持や、外部からの攻撃に対処する防衛の機能を果たしていたのである。

#### 4.2. 桂の民族学校

マエブケに一時期あった朝鮮学校は、民族団体ほど長続きはしなかったが、集住地区の共同性を考察するためには欠かせない経験であるので、ここで論じておきたい。現在、京都朝鮮第2初級学校（以下、「第2初級」）は梅津に位置している。同校は1966年に創立したが、最初の半年だけはマエブケの仮校舎で開校し、その後梅津に建った現在の鉄筋コンクリートの校舎へと移転した。

京都第2初級学校の仮校舎がマエブケに建ったころ、京都には4万8千人ほどの朝鮮人が住んでいた。京都の朝鮮人の分布は、右京・堀川を中心とした西部、西陣・下鴨を中心とした北部、七条を中心とした南部に多かった。第1初級学校は、まず無認可の自主学校として、そして1960年には各種学校として南部にできていた。しかし、西部・

北部の同胞からすれば、遠いところにある民族学校であった。だから、右京地区の同胞たちを中心に要求と要望があり、右京の初級学校建設委員会が西部に一校建てることを決議された。1966年4月開校を目指していたが、間に合わなかったので、マエブケに仮校舎が建った。建設資金は右京区管轄の右京西南支部、堀川支部同胞たちが拠出し、また募金活動は京都の各総連分会の役員が、同胞の家を一軒一軒訪問して約8000人の同胞が協力してくれたという。その募金は多い人で1千万、少ない人で1万から10万円を寄付してくれた(板垣2018)。

マエブケに仮校舎が建つに際しては、ブネの分会長であった朴さんの知り合いで、大きな土地を持っていたHFさんが快く土地を無償で提供した。HFさんは養豚場2つ持ち、マエブケ内でアパート経営もしていた。HFさんはもともと民団系であったが、学校が建つと真っ先に自分の子どもたちを川岡小学校から朝鮮学校に転校させたという。それ以降、朝鮮総連の活動にも積極的参加したという。

この校舎建設にはブネの青年たちも動員され、またオルシンたちも自主的に整地やバラックに組み立てに協力した。また、マエブケのオモニたちも、建設現場で働くオルシンたちや青年たちのためにお弁当を作って協力した。このようなマエブケ住民の協力によって建てられた仮校舎は、バラック教室が3棟、教員室が1棟の計4棟のバラック建ての校舎で、その中央には小さな運動場があった。

児童は主に右京区と中京区の児童であり、募集は一般公募であった。朝鮮学校が桂駅から遠くない場所に建ったことで、中京区や右京区内の日本学校に通っていた朝鮮人児童が、マエブケの仮校舎に転校してきた。当時、マエブケ住民の子どもたちが通う川岡小学校の朝鮮人児童数も1965年を境に激減している(表3参照)。開校から1か月で100人を超える児童が集り、教室のなかは児童でひしめきあっていたという。

マエブケの仮校舎は6ヶ月間という短い期間であったが、周辺に住む朝鮮人や日本人に与えた影響は大きかった。それまで、在日朝鮮人からも養豚部落と言われ忌避されてきた地域であったが、学校が建ち、多くの児童が通いはじめると、マエブケを見る目が徐々に変わっていった。開校中はマエブケに朝鮮の歌や音楽が流れ、児童は民族舞踊や民族楽器を奏で周辺住民に好印象を与えた。Hさんはマエブケの住民が朝鮮学校とのその児童たちを歓迎していたと語っている。

表3 川岡小学校の児童数

卒業年度	総数と朝鮮人の数	男子	女子
1959年	総数	133	140
	朝鮮人	6	6
1960年	総数	131	125
	朝鮮人	4	6
1964年	総数	87	71
	朝鮮人	3	2
1965年	総数	72	75
	朝鮮人	6	6
1966年	総数	95	94
	朝鮮人	1	1

朝鮮学校がマエブケに来てくれて、それまでちょっと暗いイメージがあったマエブケが、ぱっと明るくなったって感じはあった。子どもも元気あったし、なにゆうても、いつもカヤゲムや朝鮮の歌が聞こえてきたから、私らまで楽しくなったわ。

このように、朝鮮学校の開校はマエブケ住民のみならず、周辺住民にも影響を与え、マエブケの負のイメージを一新させたのである。

#### 4-3. ウリサラムという共同性

ここまで朝鮮総連の事務所や朝鮮学校を中心に、住民側から見た共同性の構築について論じてきた。一方、マエブケでは1960年代になると朝鮮総連系の人々だけでなく、民団系の人々も見られるようになっていった。といっても、当時のマエブケには民団系は多く見積もっても5,6軒に過ぎなかった。1980年代後半から90年にかけてマエブケの自治会長を務め、1991年の前泓町国有地払い下げ対策委員会の会長を務めたKさんも、1960年代中頃にマエブケにやってきた。「母親が、ここ〔マエブケ〕の人と知り合いで、私も結婚したばかりだったから母親がその人の知り合いから、長屋の一部屋5万で買ってくれたんです」という。Kさんの母の知人であるハルモニ(おばあさん)は、戦前からマエブケに在住する女性で、当時マエブケに数人しかいなかった民団系の人であった。

島村(2010b)が調査した福岡の事例でも、朝鮮部落のなかで朝鮮総連系と民団系が混在していたが、どちらかといえば棲み分けていた。しかしマエブケではそうした民族団体間の対立に関係なく、「チョンソンスラン」なら快く受け入れていたと住民たちは語る。Bさんは、「民団系の人でも朝鮮学校にいっぱい寄付してくれたりしてました。互いの喧嘩なんかもなかったしね。同じウリサラムで仲良くしてました」と、民団系の人々と分かちあっていたことを語る。これはタノモシの場合も同様で、Hさんによれば、「タノムシは民団も総連も関係なく、近所の人が集まってやってはった」という。

子どもたちのあいだの関係も同様である。1960年代にマエブケ人口が増加するなかで民団系の子どもも増え、広場で総連系と接触する機会も増えた。Rさん<sup>(15)</sup>は朝鮮総連系と民団系の子どもたちが仲良く遊んでいたことについて、次のように語る。

最初は朝鮮学校の先輩や後輩と広場で野球してたんです。そこに日本学校に行ってる民団系の兄さんたちとも自然に加わるようになり、一緒に野球しました。私らに総連も民団もなかったですよ。民団系の怖い先輩よう怒られましたよ。わたし下手でしたからね(笑)。ゲームも勝ったり負けたりで面白かったです。広場は大きかったですよ。みんな仲良く遅くまで野球してました。夏にはね、友達とプネに遊びに行っってね、朝鮮語知らん民団系の友達に教えたり一緒に遊んだりしてました。遊び場からプネまですぐでしたからね、しょっちゅう行っってました。

当時、南北朝鮮も、総連と民団の中央どうしも政治的対立は激しかった。しかしマエブケの朝鮮人は「チョソンサラン」どうし、争いもなく仲良く生活していたという。以下で述べるが、分会で夏に行われるハギハッキョ(夏の朝鮮語学習会)には民団系の子どもたちも参加し、朝鮮語や朝鮮の歌を学んでいる。

1950年代後半までは、マエブケの人々は自分たちのことを「チョソンサラン」と親しみを込めて呼んでいた。その「チョソンサラン」という言葉には言葉では表現できないマエブケ住民どうしの助け合いから生じた絆や情があった。そして、この言葉は1960年代に「ウリサラム」という言葉に替わっていった(Cさん、Hさん、Bさん、朝鮮総連西南支部委員長等の証言による)。インタビューのなかでも、1960年代以降にマエブケに移住してきたKさん、Rさん、BさんやTさん、Sさんはマエブケ住民のことを「ウリサラム」と呼んでいた。

なぜ1960年代のマエブケで「チョソンサラン」という言葉が「ウリサラム」という言葉にシフトしていったのか。これには、ここまで述べてきたいくつかの要素が重なっているものと考えられる。この時期、マエブケでは朝鮮総連の活動が活発になるとともに、民団系の住民も少ないながらも入ってきた。1965年には日韓条約が締結され、日本は南北朝鮮の片側の国とだけ国交を結び、それとともに韓国籍をもった在日朝鮮人だけが「協定永住」というより安定的な地位を得ることができるようになった。これは在日朝鮮人のあいだにも新たな分断を生み出すことになった。しかしマエブケでは生活のなかで、朝鮮総連系の住民も民団系の住民も分け隔てなく共同性を構築していた。「チョソン」(朝鮮)は、もともと南北のいずれか一方のみに属する語ではなかったが、南北分断の過程で、大韓民国および民団では「チョソン」(朝鮮)を朝鮮民主主義人民共和国と結びつけ、「韓国」「韓国人」と言い換えるようになっていた。1950年代までのマエブケの人々にとっては「チョソンサラン」でよかったのだが、民団系の住民にとっては「チョソンサラン」とは言いにくかった。そこで、マエブケで既に形成されていた共同性に即して、住民の誰もが言いやすい「ウリサラム」ということばが定着することになったと考えられる。

その意味で、「ウリサラム」はさまざまな背景をもった人々を包容してきたマエブケの住民たちが、自らのことを指し示すのにふさわしいことばとして、積極的に選り抜いてきたものだと言えよう。

## 5. おわりに

これまで述べてきたように、マエブケ住民は村で生じる様々な問題を住民どうしが力を合わせて共同で解決していた。あらためてノックスら(2013)の集住地区の機能論に

即して考察することをもってまとめておきたい。

マエブケは単一の地域や親族の出身者から成り立つものでも、単純なチェーン・マイグレーションによって形成されたものでもなかった。マエブケには、日本社会の排除の過程でさまざまな出身や背景をもった人々が流れ込んでいた。マエブケは国有地の上にあったため、公的にインフラが整備されることはなく、住民自らが生きるために助け合いながら村をつくっていった。したがって外部から来た朝鮮人たちも、そのなかに入り込んでしまえば、助け合いのネットワークに入りながら、生きていくことができた。住む場所、生業など、さまざまな面で「支援」の機能は、マエブケにとっては非常に大きなものがあった。

また、大人にも子どもにもそれぞれの広場があり、そこで飲食をともにしたり、遊んだり、宴を開いたりなど、そこでは朝鮮の民衆文化が色濃く息づいていた。マエブケでは朝鮮語が飛び交っていただけでなく、朝鮮総連の「サムソ」を通じて朝鮮文化に触れる場も数多く提供されていた。一時期朝鮮学校の仮校舎もおかれてもいた。その意味でマエブケは「維持」の機能も存分に有していた。

さらに、周囲の日本社会からのさまざまな圧力や嫌がらせに対して、「サムソ」を中心に住民をあげて抵抗していたように、マエブケは「防衛」の場ともなっていた。それ以前に、周囲の日本人住民にとってマエブケは朝鮮人ばかりが住む、近寄りがたい一種「異様」な場として映っていたと考えられ、そうした点において、結果的に「防衛」の機能を果たしていた側面もあったと考えられる。

ただ、しかし、ノックスら(2013)の理論でいう「攻勢」の面はマエブケには見られなかった。ノックスのいう「攻勢」は例えば少数派集団の利益のために政治に働きかけるという類のものである。在日朝鮮人は参政権からも排除されてきたのみならず、1950～60年代にはいずれ朝鮮半島に帰国するつもりでいる朝鮮人も一世を中心として多く、その意味で日本の政治に働きかける必要を全く感じていなかった。また、マエブケは国有地であったため、住民たちが行政に対して苦情を言いづらかったのも、攻勢をかけられない理由であった。その分が、朝鮮総連や祖国へのコミットとして表れていたということができる。

朝鮮総連系の住民が多いマエブケではあったが、民団系を排除することはなく、むしろ同じように共同性のネットワークを構築していた。不法占拠区という特殊な条件の下で生き抜いていくためには、そのような「上」の方で展開されている「イデオロギー」や「政治体制」よりも、目の前の住民たちどうしの協力が必要不可欠であったためだと考えられる。だからこそ、かれらは自分たちのことを朝鮮語で「ウリサラム」(私たちの人々)と呼び合ったのである。

その共同性こそが、さまざまな困難のなかでもマエブケを存続させた重要な源泉であ

ったと考えられる。もっとも本稿でカバーしきれなかった点も多い。たとえば、その後もマエブケ住民と関わりの深い日本人社会とのつながりについては、まったく言及できなかった。ウトロとマエブケは似たような状況にあり、1990年代に土地問題に直面した点でも類似しえいたが、異なる道をたどった。これが集落の内的要因なのか、外的要因なのかは、本稿で描いた以降のマエブケの状況をさらに分析することでしか明らかにしえない。こうした点を今後の課題としておきたい。

#### 注

- (1) 『朝日新聞』1999. 7. 14 夕刊。
- (2) たとえば、1982年に京都府宇治市のウトロで生まれ育った具良鉦さんは、「ウトロから一歩出れば、日本社会からは、「危ない場所。近づいてはいけない場所。」と敬遠されていたウトロでしたが、実際は、家に鍵をかけたことがないほど安全なコミュニティでもありました」と語っている(2021年12月26日、「ウトロの放火事件を許さない ヘイトクライムのない社会をめざす市民集会」での発言より)。なお、ウトロについては中村(2022)がたいへん詳細なルポを記した。本稿の関心と重なる部分もあるが、これについての論評は後日を期したい。
- (3) マエブケの成立史については、別稿「都市に村をつくるー戦後京都マエブケの朝鮮人の生活と狭知ー」を現在投稿中である。
- (4) 前掲・別稿より。
- (5) 現、京都府朝鮮総連西南支部委員長のインタビューより。
- (6) 1954年、警察が密造酒製造のかどで手入れに入られた。野山さんは飯場長屋を所有していて、それをアパートに改良し賃貸をしていた。
- (7) 在日朝鮮人にとって「チョンサンラン」(朝鮮人)という響きは、「チョウセンジン」という日本語の響きと比べて、安堵感に浸る響きであり、助け合いという連帯を連想させる言葉でもある。
- (8) 阪急電車の工事のため動員されていた朝鮮人は西院周辺に住んでいたのだが工事終了後その場所から追い出され、桂川と小室川(天神川)の河川敷を不法に占拠し生活するようになる。戦後、そこから追い出されると吉祥院周辺で生活するようになる。
- (9) 現、京都朝鮮総連西南支部委員長の語りより。
- (10) 前掲・別稿より。
- (11) 現、京都朝鮮総連西南支部委員長の語りより。
- (12) 1955年5月25日、浅草公会堂で開かれた結成大会で民主民族教育の発展というテーマで教育方針がだされ青年、女性に対する教育事業に強化されるようになった。その後、総連の活動家たちは日本各地の支部やブネを回って青年や女性達に朝鮮の歴史を教えると同時に金日成將軍の革命思想についても熱く語った。関西の学院は「8・15政治学院」であったが同じ政治学院は東京にもあって、そこは「3・1政治学院」と呼んだ。
- (13) 帰国者が予期していた「地上の楽園」的な待遇が得られないという不安を日本に住む親族や知人に伝えてという事情があった(小此木2004: 156)。
- (14) 「キチガイ」とは京都の朝鮮人2世がよく口にする言葉であり、熱心や卓越しているという肯定的な意味で使われる場合と、過剰や過多(無茶苦茶)といった否定的な意味でも使われた場合もある。
- (15) 父親の名前はチョウ・ソンドン、1925年ブサン生れ。釜山大学出身。総聯の活動家で朝鮮戦争の間に日本に密航してきた。高校の時に受けた拷問で体が弱かった。趙さん祖父も活動家で民戦の幹部をしていた。

#### 参考文献

朝日新聞(1999)『朝日新聞』1999年7月14日夕刊。

- 板垣竜太編 (2017) 『京都市西部における在日朝鮮人の仕事と生活』 同志社大学社会学部社会学科・社会調査実習報告書.
- 呉圭祥 (2006) 『朝鮮総連 50 年 記録 在日朝鮮人運動』 学友書房.
- (1992) 『在日朝鮮人企業活動形成』 雄山閣.
- 小此木政夫 (2004) 『在日朝鮮人はなぜ帰国したのか』 大学図書.
- 金菱清 (2008) 『生きられた法の社会学 - 伊丹空港「不法占拠」はなぜ補償されたのか -』 新曜社.
- 京都新聞 (1991) 「解放への日々 XI - 忘れられた在日 -」 1~6, 『京都新聞』 1991 年 12 月 1 日~12 月 7 日  
[本文では 1 回目の連載を「1991: 1」のように表す].
- 京都市建設局編 (1965) 『土地区画整理事業概要』 京都市建設局.
- 島村恭則 (2010) 『「生きる方法」の民俗誌 - 朝鮮系住民集住地域の民俗学的研究 -』 関西学院大学出版会.
- 精華町史編さん委員会編集 (1992) 『精華町史, 史料篇 2』 精華町.
- 中村一成, 2022, 『ウトロ ここでは生き、ここで死ぬ』 三一書房.
- 樋口雄一 (2001) 『戦時下朝鮮の民衆と徴兵』 総和社.
- 朴在一 (1957) 『在日朝鮮人に関する総合調査研究』 新紀元社.
- ポール・ノックス, スティーブン・ピンチ (2013) 『都市社会地理学 改訂版』 (川口太郎・神谷浩夫・中澤高志訳), 古今書院.

**Our People, Our Place:**  
Communality of Korean Residents in Maebuke Village of Kyoto

Joogwon Oh

---

This study explores how the Korean people who resided in Maebuke lived their own lives during the 1940s to the 1960s. Before the World War II, many Korean workers that were gathered to build munitions factories stayed at the workers' living quarters in this area. After the World War II, those who lost their jobs due to factory shutdowns settled down in Maebuke, and many Korean people migrated from other regions. Since Maebuke was a state-owned land, however, they could not be provided with governmental services and thus had to develop local infrastructure by themselves. Despite such tough situations, the Koreans in Maebuke took every possible measure to survive. They worked together to tackle various community businesses such as renovation of workers' living quarters and sharing of pig farming expertise. This article depicts the constructing processes of "URISARAM", which is what Korean people use in their native tongue for our people/our place, by focusing on the mutual support among the residents, the gathering spot where they interacted, and the ethnic organization offices.

**Key words:** Korean in Japan, Communality, Gathering Spot